

「ウイルス研究が育んだ現代生命科学」を拝聴して

岐阜大学大学院連合獣医学研究科 人獣共通感染症学研究室 博士課程 4年

中川 敬介

◆ 概要

今や当たり前とされる生命現象の多くはウイルス領域の研究からもたらされました。実際、これらの発見により多くのノーベル賞が与えられています。「ウイルスをプローブにして生命の原理を理解する」ことで、ウイルス学は生物学に対して大きな貢献をしてきました。そうした様々な知見が、どのような過程を経て発見されたのか、長年ウイルス学に取り組んでこられた永田先生が解説して下さいました。レトロウイルスに由来する逆転写酵素の同定、アデノウイルスを用いたスプライシング機構の発見、脳心筋炎ウイルスからの **IRES** の発見、NLSはSV40の **T antigen** で最初に見つかったことなど・・・他にも、日本人による、**Q β** フェージレプリカーゼの先駆的な研究や、昆虫細胞質多角体病ウイルスを用いたキャップ構造の発見なども紹介して下さいました。

◆ 感想

いつも何気なく利用している実験手法や、今や当たり前とも言える生物学の知見の多くがウイルス研究から生み出されたことは、恥ずかしながら知りませんでした。一方で先生は、「ウイルスをプローブにして、生命原理を理解してきた時代を経て、現代では生物学からウイルス学への貢献も目立つようになってきた」、とも仰っていました。私はこの点にウイルス学の未来を見た様な気がしました。他の分野から得られた知見とウイルス学とが融合して、新しい発見が生まれたら面白い。そしてそれは生物学の発展に繋がる・・・そんなことを想像してお話を聞いていました。生物学に対して大きな貢献をしてきたウイルス学が今後何を生み出すのか？それを想像するとワクワクする、そんな魅力をもった講演を聞かせて頂きました。